



三 条 法 人 会 長 賞

『自分たちができること』

三 条 市 立 第 二 中 学 校

三 年

い から し
五 十 嵐

ゆ う と
悠 人

「税金って、ちゃんと使われてるの？」ある日、友人のそんな一言が印象に残った。たしかに税金は社会を支える仕組みだと教えられる。でも、どこか信用しきれない。払うのは国民の義務。けれど使い道は見えにくい。私はその矛盾をずっとモヤモヤと感じていた。

小さい頃から税金に関する話は「難しいもの」としてさけてきた。

けれど最近ニュースで政治家の税金の私的流用が報じられたり、高齢化社会で社会保障が厳しくなるといふ話を聞くたび、「私たちの未来と無関係じゃない」と思うようになった。たとえば道を舗装したり、災害時に避難所を設置したり、教科書を無償で配ったりするのは、すべて税金が使われている。そう聞くと、「ありがたいもの」のように感じる。けれど、その一方で、建設費が何倍にも膨らんだ公共施設や、選挙のたびに変わる無計画な政策にも、税金は、流れていく。税金は、「みんなのため」にあるはずなのに、「誰のため？」

と思うことがある。私たち若い世代の声が反映される場は少なく将来重い税負担を背負うのに、意見を言う機会すら与えられていないと感じる。だからといって、興味を持たなければ、ますます声は届かなくなる。SNSでは、「税金を払っても何も変わらない」と諦めたような言葉をよく見かける。でも本当にそうだろうか。私たちが無関心でいれば税の使い道は今のままだ。けれど知ろうとし、意見を持つことで少しずつでも社会を動かすことはできないか。最近では、若者向けの政策カフェや、税金の使い道を市民が投票で選ぶ「参加型予算」といった仕組みも始まっているらしい。大人の世界だと思っていた「税」も、少しずつ開かれつつある。だからこそ、私たちの側から近づく勇氣が必要なのかもしれない。

「税金」と聞くと、むずかしそう、面倒くさそうと思ってしまう。でも、それは自分の暮らしや未来に直結しているテーマだ。黙っていても、無関心でも、税金は勝手に決められていく。だからこそ、黙らず、考える。少しずつでいいから、学び、話し、意見を持つ。それが、税をただの義務ではなく、「自分たちの社会を形作る道具」として使いこなす第一歩なんだろうと思う。社会は勝手に良くなる。でも、私たちが知ろうとすることから、動き始める。中学校の内に所得税や、消費税、相続税、地方税などをたくさんくわしく知ることです大人になったら、楽により良い社会を作っていけると思う。

